血尿を伴った豚のポリープ性膀胱炎について

稲 田 弘 毅*

(昭和 49 年 7 月 30 日受付)

Polypous Cystitis in Swine with Hematuria

KOKI INADA (Health Center, Kanatsu, Prefecture of Fukui)

SUMMARY

Two sows were studied pathologically. Sow 1 was 7 months old and seemed to have been suffering from hematuria during life. It exhibited thickening, folding, and extensive hemorrhage of the cystic mucosa and yellowish white foci of millet size in the kidney.

Sow 2 was about 3 years old and had been suffering from severe hematuria for about a month before death. It revealed marked thickening, folding, and

petechiae of the cystic mucosa and yellowish brown detritus attached to the pelvic mucosa.

Histologically, polypous cystitis was observed in both sows. In addition, interstitial nephritis and small abscesses surrounding the uriniferous tubules were noticed in sow 1 and suppurative pyelonephritis was in sow 2. Two sows may have been involved in ascending bacterial infection.

はじめに

近年、牛の膀胱血尿症が注目され、病理学的にその膀胱病変が論議されている。しかし、豚における血尿症例についての報告は少ない。今回筆者は、豚において生前血尿症を呈していた例に遭遇しその泌尿器系を中心に病理組織学的検索を行なったので、概要を報告する。

材料および方法

検索した材料は 2 例で、両例とも畜検査の際入手した。

第 1 例：雌、7 カ月齢、昭和 46 年 8 月 10 日殺。

第 2 例：雌、約 3 才、昭和 46 年 8 月 10 日殺。

材料は 10% ホルマリン液で固定し、パラフィン包埋、HE 二重染色、また、必要に応じ他の染色を実施した。

臨床所見

第 1 例は不明であるが、病理学的検索の結果から生前血尿を排泄していたものと推測されたので検索材料に含めた。第 2 例は生前約 1 カ月間著明な血尿が認められた。

肉眼所見

第 1 例：膀胱には粘膜の肥厚、皺襞形成および広範な出血があり、腎臓には粟粒大黄白色限局巣を伴う間質性腎炎が認められた。

第 2 例：膀胱粘膜の高度の肥厚と皺襞形成ならびに散在性点状出血が認められた。

組織学的所見

両例とも主要な組織学的変化は泌尿器系とくに腎臓お

よび膀胱にみられた。

第 1 例：膀胱粘膜上皮は増生し、粘液変性に陥り、粘膜固有層および粘膜下織では充血、出血、水腫、形質細胞の高度の増数、所によりリンパ球の集簇が認められ、粘膜層はポリープ状に膀胱腔に突出している(図 1)。

図 1 第 1 例、膀胱、粘膜はポリープ状に凸出し、粘膜上皮は粘液変性を示す。

PAS 染色 × 14

腎では、慢性間質性腎炎と尿細管を中心とする小膿瘍形成が認められた(図 2)。

第 2 例：膀胱の変化は第 1 例とほぼ同様であるが、粘膜上皮の増生および粘液変性は第 1 例より高度であった。固有層には所により線維芽細胞および組織球が増殖し、血管の新生も認められた(図 3)。腎では、腎盂上皮

* 福井県金津保健所 (福井県坂井郡金津町高塚)

図2 第1例 腎臓, 広範な間質性腎炎と小膿瘍の形成を示す. HE染色, $\times 28$

図4 第2例, 腎臓, 化膿性腎盂腎炎を示す. HE染色, $\times 280$

図3 第2例 膀胱, 固有層における血管新生を伴う線維芽細胞および組織球の増殖. HE染色, $\times 280$

細胞は消失し, その部に菌塊をともなった好中球を主とした細胞性類廃物がみられ, 肉芽組織の増殖も認められた(図4). 細菌塊はグラム染色で陽性の球菌であった.

考 察

両例の膀胱の組織所見はきわめて類似しており, ポリープ性膀胱炎と診断された. 成書ではこの種の変化はとくに牛および豚では稀でなく, しばしばポリープ形成と粘膜上皮細胞の粘液変性を伴うと記載されている. また,

膀胱炎は上行性に細菌性腎盂腎炎を伴うことが多いという報告があるが, 今回の第2例では腎臓に細菌性腎盂腎炎を認め, これは明らかに上行性細菌感染の像であった. 第1例でも尿細管を中心として膿瘍の形成がみられ, 上行性細菌感染の可能性が強い.

今回の例においては, 血尿が膀胱あるいは腎盂の出血に由来することは明らかである. 牛の血尿症においては, 単純性慢性膀胱炎や腫瘍性の変化が論議されているが, 粘膜上皮の増生・粘液変性を示す例の報告はあまり見当たらない. 動物の差, あるいは原因学的な違いはあるにせよ, 豚の血尿症例において粘膜上皮の増生と粘液変性を強く示したポリープ性膀胱炎の所見は病理学的に極めて興味深いものであると考える.

[昭和48年度 日本獣医公衆衛生学会(中部)褒賞論文]

(海外文献要録)

牛の気管枝癌

H.W. LEIPOLD, J. L. NOORDSY & J. E. COOK
J.A.V.M.A., 165 (7), 628~629, 1974.

7才齢のヘレフォードで, 創傷性第2胃炎の病歴があり, 呼吸器障害が6週間継続していた.

被毛光沢なく栄養状態不良, 左右両肺野に著明な乾性ラッセル音聴取. 体温 39°C , 血液検査結果では著しい左方変移がみられた. 重篤な慢性肺炎として抗生剤による治療を行なうも効果なく, 試験切開により腫瘍塊を確認, 生検により癌腫と診断した.

肺は胸廓全体におよび, 一部をのぞいて, 暗灰色で硬く, 剖面は瀰漫性白色結節がみられた. 心臓, 横隔膜, 第1胃, 小腸, 脾臓, 腎, 副腎にも結節がみられた. 組織学的検索の結果, 気管枝壁に原発し, リンパ系を介して転移したものと考えられる. 縦隔膜リンパ, 心筋などの転移病巣も, 原発巣と同様な組織像を呈していた.